

障害者スポーツ教育による障害者理解の変化

～小学校4年生を対象として～

畑村孝輝 奈良教育大学

1. 目的

本研究の目的は、障害者理解の向上には障害者との接触経験の有無・頻度・低年齢期の重要性を述べた先行研究や体験型学習と知識学習の双方を組み合わせた学習の重要性を述べた先行研究から障害者スポーツを通じた障害者理解教育の効果を調査し、今後の障害者理解教育の発展の一助とすることが目的である。

2. 研究方法

- 1) 対象者 奈良県内の小学校4年生 117名
- 2) 調査方法 障害者スポーツの体験や義肢工場の見学の前後でのアンケート
- 3) 分析方法 クロス集計表を作成し、カイ2乗検定を行った。なお、期待値が5未満のセルが20%以上になった項目については正確確立検定を用いてカイ2乗検定を実施

3. 結果と考察

- 1) 障害者についての知識・理解、関心・意欲、行動・態度について前後比較を行った。知識・理解は実際に工場見学等で見た理説明を受けた補聴器と盲導犬の項目で有意差が見られた。義肢や車いすに関しては授業前の認知度も高かったため大きな変化が見られなかった。関心・意欲については義手、義足、白杖、車いす、補聴器、手話、盲導犬の項目で有意差が見られた。行動・態度については2カ月の間に生活の中で障害者とのかかわりを持つ機会がある児童が少なかったため有意差は見られなかった。
- 2) 障害者スポーツについての知識・理解、関心・意欲、行動・態度について前後比較を行った。知識・理解については「義足をつけて走っている」という項目で有意差が見られた。授業の中でパラリンピックの競技の様子などを動画で見たことが考えられる。また、車

いすバスケや車いすテニスは事前アンケートの段階での認知度が高かった。関心意欲に関しては「車いすで走る」「車いすバスケ」の項目で有意差が見られた。実際に車いすバスケは授業の中で児童が体験していることが考えられる

4. 結論

本研究では、実際に体験を行ったり、見て触れて説明を受けた項目で有意差が見られたことから障害者理解教育における体験学習の有効性が証明できた。障害者理解学習に障害者スポーツを取り入れ障害者との交流を行うことは児童がどのように社会環境を変えていく必要があるのか考える機会になるということを明らかにできた。授業計画の課題としてマイナーな障害者スポーツの理解促進がある。実際に児童は「ゴールボール」を体験していたが知識・理解について向上が見られなかった。障害者スポーツ独自のスポーツについての学習の方法について今後検討していく必要がある。

<参考文献>

- 1) 海老原修, パラスポーツ体験による障害者対応行動変容の比較, 日本体育学会第69回大会体育社会学専門領域発表論文集第26号: 153-157, 2018.
- 2) 河内清彦, 障害者等との接触経験の質と障害学生との交流に対する健常学生の抵抗感との関係について: 障害者への関心度, 友人関係, 救助行動, ボランティア活動を中心に, 教育心理学研究, 54(4): 509-521, 2006.
- 3) 川間健之介, 障害を持つ人に対する態度: 研究の現状と課題, 特殊教育学研究, 34(2): 59-68, 1996.
- 4) 山内隆久, 視覚障害者児に対する態度の変容に及ぼす対人的接触の効果, 教育心理学研究, 32(2): 233-237, 1986.